



ぶかぶか漂う  
第12回

## ブラジルでの子育て②

### ～長女編～



り上がり。泣いてばかりだった娘の姿を彼らも覚えていて、成長を温かく見守つてくれていたのです。

その頃にはポルトガル語がほぼ理解できるようになっていて、友達の家にお泊りに招かれることもありました。そこで娘は同じ歳の友達が自分の部屋で一人で眠りにつくことにもても驚き、感心したそう。しかしながらといってその晩、一人寝にチャレンジするでもなく、娘はその家の母親に「私は一人では寝られないから一緒に寝て」とちやっかりお願ひして、自分だけ寝かしつけてもらたというから驚きました。あんなに人見知りだったのに、ずうずうしいほど甘え上手！

当時は笑い話で済んだのですが、問題は帰国してから。板についた「みそかす」は日本の小学生になつてもなかなか抜けませんでした。さらにブラジル仕込みの図太さは相当なものでした。「私はできなくてもいい」とい

園が提案してくれた対応策は、登園時は二歳の弟のクラスに入り、三十分ぐらいしてから年中クラスの先生が迎えにくるというもの。二歳の弟を頼る姉だったので。数か月間そんな日々が続いた後、登園時から自分の教室に入れるようになります

幼稚園年中と年長の二年間をブラジルで過ごしました。人一倍おつどりしていく甘えん坊。人見知り・場所見知りがひどかつた長女。ブラジルに引っ越した当初は幼稚園に連れて行つても私にしがみついて離れず、泣いて泣いて…。幼稚園にどうでも私が初めて受け入れる日本人であり、どう接していいか戸惑つている様子。日本でもすでに集団生活をしてきて、慣れれば絶対に大丈夫になる」と、私は辞書を引き引き、なんとか先生たちに話しました。もちろん私だって「大丈夫になる」かなんて、わかつてはいませんでした。

一年目の合唱発表会ではカロリーナにこうそり手をつないでもらったまま舞台に立ちましたが、二年目の学芸会はしっかりと一人で。最もセリフの少ない役ですが、娘がポルトガル語でセリフを言うたびに、ブラジル人の保護者たちは拍手喝采の大盛

う顔で挑戦も努力もしない態度が、事あるごとに見られました。

それは異国の地で生きていくために無意識に身につけた彼女なりの処世術だったと理解はしています。それでも私は「もう言葉のハンデはない」とか「努力する前にできないと言うな」とか、感情的に叱ってしまうこともよくありました。できるだけ、「やってみたらできた」体験をさせようともしてきました。

そんな娘ももう五年生。苦手を克服しようなんていう気はやはり全くありませんが、得意だと思うことが一つ、二つ見つかたようです。少しずつ積極的になつてきました。

**文・写真  
小宮華寿子**  
出版社編集部員  
経て、フリー  
写真家として  
ラジオ、雑誌、  
書籍などに活躍。  
著書に『ブラジル  
の手しごと』(メイツ出版)がある。

**イラスト・  
デザイン  
寺沼麻美**  
切り絵作家、時々  
デザイナー。ゆ  
らゆらゆれる北歐風手作りモビール  
(ネコ・パブリッシング)を監修。

した。カロリーナというアシスタンントの先生のおかけです。年中は一クラスマ二十人程度で、担任のほかにアシスタントの先生がついていました。カロリーナは長女をとてもかわいがつてくれました。赤ん坊を扱うよう毎日長時間抱っこしていくくれたのです。カロリーナの言葉は分からなくともひたすら抱っこされ、たの友達ともよく遊ぶようになりました。ボネーカ(お人形さん)と呼ばれ、友達からもよく抱っこされていました。